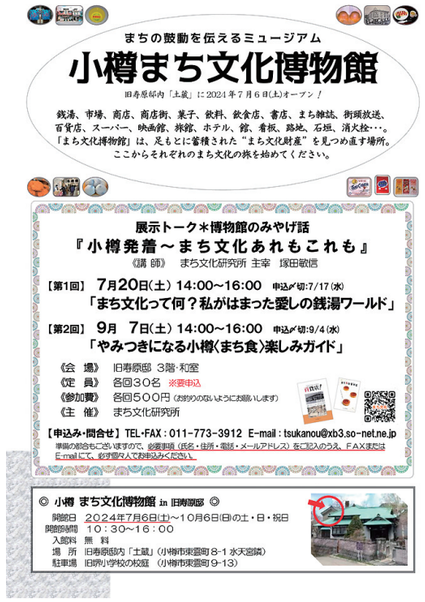
塚田敏信
まち文化研究所主宰

２０２４年７月６日、水天宮の北側に建つ旧寿原邸の土蔵に「小樽まち文化博物館ｉｎ旧寿原邸」（以下、まち文化博物館）がオープンしました。建物は大正元（１９１２）年に小豆将軍の異名もある雑穀商高橋直治が建て、昭和９（１９３４）年に寿原外吉が買った邸宅です。

昭和61（１９８６）年に小樽市に寄贈され、平成３（１９９１）年には市の歴史的建造物に指定されました。現在はＮＰＯ法人小樽民家再生プロジェクト（小民再）が、市の委託を受け管理運営しています。

まち文化博物館の展示の企画・設営は、小民再から依頼を受けたまち文化研究所が担当し、今年は７月６日～10月６日の土日祝日に公開しました。



小樽まち文化博物館in旧寿原邸」
案内チラシ

【まち文化をめぐる状況と小樽】

〝まち文化〟は、〈ひと〉が集まって暮らすことによって生み出される〈もの〉や〈こと〉、そしてそのつながりをあらわす造語です。

たとえば、銭湯、市場、百貨店、菓子、餅、パン、飲食店、喫茶店、駅弁、商店街、包装紙、まち雑誌、街頭放送、工場、酒、清涼飲料、旅館、ホテル、建物、各種の館、看板、街区表示板など、要するにわたしたちが暮らす〝まち〟を構成する、ほとんどの要素が含まれます。

ただあまりに身近なゆえに、ふだんはなかなか記録されないというのがこれまでの実情でした。

実際それらを調べようとすると、資料がほとんどないという現実に直面します。結局自ら現場で話を聞きながら掘り起こすしかありませんでした。

今回まち文化博物館に展示した資料は、そのかなりの部分が小樽で実際に使われていたものです。とくに銭湯に関わる希少性の高い資料の多くが、小樽の銭湯にあったものでした。そのことからも小樽のまち文化の厚みが伝わってきます。

銭湯文化、菓子文化、駅弁文化
などの展示

まち文化博物館の館内

【銭湯文化が動き出す】

まち文化のフィールドワークを本格的に始めたのは昭和57（１９８２）年のことです。道立高校の教員として釧路に赴任したのがきっかけでした。30年暮らした札幌とは気候風土など様々な面で異なる釧路での時間は、目からウロコの連続で、そこではじめて〝まち〟を、そして〝まち文化〟を意識します。同時に授業等を通して生徒たちと地域調査記録活動を始めました。

なかでも大きかったのが、銭湯との再会です。昭和25年生まれの私にとって風呂イコール銭湯は当たり前で、釧路で風呂付きの公宅に入るまでははほぼ銭湯生活でした。ただそれまでは私にとって単に体を洗うだけの場所だったのです。

釧路や札幌の高校生とまとめた
地域調査記録集

それが釧路で変わりました。体を縮めて入る内風呂の窮屈さが、手足を存分に伸ばして入っていた銭湯の魅力に気づかせます。そして出かけた銭湯で、目覚めました。建物、暖簾、番台、ハリモノ、浴槽、湯桶、壁のタイル絵などが一斉に語り出したのです。

以後、銭湯に行く目的が変わりました。心身の解放感を得るだけでなく、脱衣場や浴室などの細部を記録し始めたのです。というのもそうしたことは既存の本や資料に書かれておらず、知りたいことは自分で調べるしかないという当たり前に気づいたからです。

そこでつながったのが、それまでなんとなく惹かれて通っていた小樽の銭湯などの姿でした。小樽には多彩なまち文化が凝縮されていたのです。その流れで、教員になった年から小樽への異動希望を毎年出し続けましたが、結局かなわぬまま定年を迎えました。

稲穂湯の外観

【原点は稲穂湯】

小樽との関係を決定づけたのが、稲穂湯（稲穂１－８－３）の存在です。昭和初期に道路拡幅によって建て替えられた建物は、外壁をスクラッチタイルで覆われ、装飾やアーチ窓がとても印象的でした。モザイクタイルの灯台に迎えられて入ると、脱衣場の天井からシャンデリアが下がり、浴室ではタイル絵巻が展開される稲穂湯は、まさに銭湯美術館でした。

稲穂湯の浴室タイル絵